

第二期 第八十号 (三版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2023. 03. 20 定有堂書店 発行

岩田直樹氏著書と「他者論」 奈良 敏行

「他者問題」に囚われ続ける―拙著刊行に寄せて 岩田 直樹

かたりあふ書店のこと 鳥居 貴彦

汽水のほとりから (24) 小原 修治

「従順な同盟国」にはなるな 萩原 俊郎

深い学びをめぐって XI 松田 裕史

家族教師と家族葬 ―人を見るとは？ 芝野 浩貴

映画の中の一冊 ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十九 内田 克彦

八代日記 (三十六) 齊藤 仁昭

四姉弟 続 秦阜 梅林

横たわりながら活字を考える 三浦 永理

野苺事件 ミス・マーブルからの贈り物 (二) ドラメラア

…… 編集後記



岩田直樹氏著書と「他者論」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

岩田直樹氏は定有堂教室「読む会」のテキスト選定を二十六年つづけている。選定される図書は多様性に富んでいる。また定有堂書店のホームページでも二十二年にわたり連載が続いている。中核的な論考は鳥取西高等学校の紀要『鳥城』に多数収録されている。その多数の仕事が選抜され、このたび一冊の書籍にまとまった。

タイトルは『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』(以下『再解釈』と略)、副題は「―生活世界における公共性と倫理―」、版元は地域に根ざす出版を志す「小取舎」(代表村瀬謙介)。長い間の読書会での付き合いで、岩田氏の問題意識は「善」の追求にあるのではないかと常々感じていた。「公共性と倫理」というテーマはふさわしい切り口だと確信した。

この度の『再解釈』に目を通してあらためて感じたのは、「他者論」という一貫した問題意識があったのだなという

気づきだった。

岩田氏は東京大学理学部地球物理学科を卒業後、理学系研究科(大学院)、のち教育学部教育学科で教育哲学を専攻している。不思議な経歴だが、二十二歳のときの体験が何事かだったのだと思える。大学院在籍時のマリアナ・パラオ海溝調査航海の、早朝船上体験だ。

《莊嚴な日の出に感嘆しながら、広大な太平洋の上に私しか存在しないという孤独感、しかし心安らぐ地球との一体感を抱くとき、神秘的な至高感にとらわれるのであった。》

(P.111)

これが文転につながる契機だ。「科学は世界の半面しか把んでいない」(P.112)という認識である。ここには「体験の絶対性」がある。そしてこの「絶対性」には危うさも伴う。郷土と同じ高校そして同じ大学を卒業した橋田邦彦がいる。医学者として出発し総力戦体制下で教育政策の最高責任者となり、敗戦直後自死した人だ。「橋田は科学論から出発し、抽象的な科学では到達できないあるがままの流動する生を『体験』によって会得することを主張した。」

(P.13) ここまでは岩田＝橋田の、「体験」を基とする回心は類似している。しかし岩田氏が批判するのは「他者問題」への認識の欠落だ。「体験」の中で、人と自然は一如となる。しかし橋田のこの「自然」は、「環境日本」「国

体」だった。この橋田邦彦批判は、岩田氏にとって通り抜けないなければならない、思想的課題のはずだった。

自己＝主体は「ノエシス」という指向性の性質のもので、ある何ものかとの相関関係にある。この相関関係をどのように構築するかが、岩田氏の主題なのだ。「他者問題は近代哲学の喉元に刺さったとげである」(P.135)ここに岩田氏の探求の核心がある。この論理を緻密にたどり直すために、氏は現象学を究めていく。フッサールは現象の実在をいったん留保する(エポケー)ことを教え、相互主観的世界へ導く。サルトルは他者を相克と見なし苦闘する。メルロ＝ポンティは身体性に着目し「共感覚」を提示する。現象学の多数の知見を経巡っていくのだが、日本では廣松渉に大きな関心を寄せる。廣松の他者論は、「四肢的構造」に代表される関係主義、そして事的世界観に読み取れる。橋田邦彦と異なり、ここでは「社会」に対峙する視野の拡大が顕著である。

「善」に親和性の強い岩田氏が出会ったもう一つの存在は、「個々人の意図のベクトルの合力が歴史を動かす」という理念につらなるアーレントである。つまり多数性を条件とした、政治的人間の形成が、「義」の存立条件でもある。アーレントは、「他者性」と「差異性」は、人間の「唯一性」を形成すると考える。つまり異なることによつて

対話が生まれる。「義」の中に己を確立するというのが岩田氏の探求課題であると思うが、岩田氏はそのことを次のように考える。

《アイデンティティは、世界の中で、自分と異なる人々に対して、自分をひとまとめの人格として現象されることによって形成される》(P224)

三百十頁ほどにもなる大著を、「他者問題」そして「義」への意思と読み取る、わたしの理解は、あまりに狭いといか言えない。しかし著者がその「体験」を伝えようとする意思は、読み手の心に濃密な強度で響いてくる書物である。

2023.02.12

岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』生活世界に

おける公共性と倫理』小取舎 2023

一八〇〇円本体

太極拳教室（会場 定有堂三階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

（講師）岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
岩田直樹 著
小取舎 発行

「他者問題」に囚われ続ける ―拙著刊行に寄せて

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授

「読む会」選書人

一年前のちょうど今頃、前職（高校教員）を定年退職する直前には想像すらしていなかったのだが、このたび拙著を上梓することとなった。

タイトルは少々長い。『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈―生活世界における公共性と倫理』。当初は『生活世界・公共性・倫理』の予定で進んでいたが、これでは具体的な中身がわからないのでは、という話になった。最近長い書名の本も多いので、思い切って内容が推測できる表題にしたのである。

昨年四月、三〇年近くお世話になっている定有堂書店私は一九八〇年一〇月の開店直後に訪れている。店主の奈良敏行さんから「今まで書き溜めてきた論考を本にまとめませんか」と提案されたとき、思いもよらぬことでとても驚いた。さまざまテーマで定有堂書店ホームページや勤務校の紀要に寄稿しており、何を選ぶかが問題となった。鳥取に出版文化を根づかせようと奮闘する新進気鋭の編集者、小取舎（二〇二〇年一月設立）の村瀬謙介さんと奈

良さんのお力を借りて本書が完成した。お二人には心から感謝を申し上げたい。

拙著は、世紀の境目である一九九〇年代から二〇〇〇年代半ばにかけて書き継いでいった四つの論考（プラス四つの小文）を所収している。

冷戦終結直後の一九九〇年代初頭、民主主義が世界のスタンダードになり、栄光の新世紀（人類が経験したこともない輝かしい世紀）が到来すると期待していた人は多かっただろう。日本がまさか「失われた三〇年」の底に沈み続けると思料する人はいなかったと思う。二〇二三年の現在、世界そして日本は分断され、グローバルな格差社会が人々を苦しめている。前世紀末の状況よりはるかに後退している今日、公共性、倫理について、執筆当時にもまして真剣に考えるべきではないか。そのための個人的な出発点として拙論を位置づけようと考え、字句修正以外は行わず、あえて初出当時のままにしている。

本稿をここまで書き、翌朝「さあ、これから各論考を簡単に解説しようか」とPCの前に向かうと、奈良さんからメールに『音信不通』の草稿が添付されていた。拙著の書評である。

「やられたな」というのが率直な読後感。私が言いたいことがすべて書いてある。ここまで深く読み込んでいた

だいた過分な書評に恐縮しきりである。ここでは高密度のその書評を前提に、各論考の位置づけについて補足したい。

奈良さんが言及されているとおり、西太平洋上での「回心」（少し大袈裟か）めいた体験がきっかけで、私は三〇年以上も「他者問題」に囚われ続けている。

第一〜四章のタイトルはそれぞれ次のとおりである。「橋田邦彦の思想とその源泉―総力戦体制下における科学と思想―」「廣松渉は「近代的世界観」を超越しえたか―二〇世紀哲学の一断面―」「活動的生活 *vita activa*」、あるいは「世界への愛 *amor mundi*」―マルクス／マルクス主義に抗するアーレント―」「生活世界・公共性・倫理」。

橋田邦彦論、廣松渉論は「生活世界」論、アーレント論は「公共性」論である。第四章はそれまでの議論を踏まえて、フッサール、メルロ＝ポンティ、廣松、アーレント、ハーバーマス、レヴィナス、セン（厚生経済学、一九九八年ノーベル経済学賞受賞）に依拠しながら「どのようにして生活世界から倫理が立ち上がってくるかを論じている。今書き加えらるとすれば、フーコーの生権力論、ドゥルーズ（「ガタリ」）の社会倫理学・社会論理学は欠かせないだろう。

現象学・道元・陽明学に大きな影響を受けた橋田思想には、環境世界論はあっても他者問題が存在しない。廣松哲

学における他者問題の精緻な原理的考察は、管見ではフッサールやメルロ＝ポンティのそれを超えた哲学史上の最高レベルに位置するだろう。

他者存在が理論的に確立された上で、アーレント・ハーバーマスの公共性論、レヴィナス・センの倫理の立ち上げが続く。（廣松他者論を認めない論者は、拙著の構成は理論的に破綻していると批判するだろう。）

他者は哲学的営為とは無関係に日常世界に存在する。生活世界↓公共性↓倫理は理論的な先後関係に過ぎず、生活世界・公共性・倫理は同時的（共時的）に動的発生を繰り返す。

あるいはこうも言えるかもしれない。ドゥルーズ『意味の論理学』の概念装置を翻案すれば、「第一次秩序↓深層身体」は橋田、廣松、メルロ＝ポンティ、「第二次組織」は表層、皮膚の身体はフッサール、廣松、「第三次配列」は高所の声はアーレント、ハーバーマス、レヴィナス、センにそれぞれ図式的に割り当てることができるだろうか。

他者問題をめぐる二〇世紀哲学小史としても読める拙著を手にとっていただきたいのはやまやまだが、三百頁以上もあって、書いた本人ですら読み通すのに時間がかかる。読者の皆さんから数多くのご指摘・ご教示・ご叱責をいただくことができるのを楽しみにしている。

かたりあふ書店のこと

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

その古本屋は、高知市のさびれた港の近くの国道からだ
いぶ外れた道路沿いにぼつんとあつた。三回に一回はシャッ
ターが閉まつていて、すすごと帰るしかなかった。開い
ている日も棚と棚の間には床から本が積み上げられていて
体を斜めにしないと入れない。かき分けるようにして奥の
棚までたどり着くがどこが奥なのかもわからない。引つ張
り出した本には値段もついていない。この店はどんな客を
待っているのか、まったくわからなかった。でも秘密基地
を見つけた子どものように何度か通つて勝手にドキドキし
ていた。

卒業論文をダラダラと書いていたとき、ふとその店に行
こうと思った。探していた本は別に大学の図書館に行けば
あることはわかつていた。文庫にもなっている有名な本な
ので購買の小さな本売り場にもあるだろう。ただ時間稼ぎ
のようなつもりで店を訪れた。店主に本のタイトルを告げ

る。話したのはこれが初めてなのではないだろうか。「あ
のへんの下の方にあるんやないろうか」と入口近くの本の
山を指さされ、ガサガサやっていると確かに探していた本
が出てきた。隣の山の下にも同じ本が見える。もちろん値
札はついていない。「千円から五百円のあいだで、いくら
でもえい」と店主は言った。結局五百円だけ受け取ったの
ではなかったか。

大学を卒業し、実家のある京都に帰つてからも高知に行
くときは時間を見つけて店に足を運んだ。挨拶をすると店
主は僕のことを覚えていてのかわからないのか、曖昧な挨拶を
返して店の外に出ていき、ぼんやりとタバコを吸った。あ
るとき急に「お腹は減つてへんかえ」と聞かれたことがあ
る。近くのスーパールの駐車場にあるうどん屋に入り定食を
ご馳走してもらった。店主は向かいに座りコーヒを飲ん
だ。「京都はえいねえ」と何度も繰り返し、「京都に行つ
て絵葉書が買いたい」と言った。

帳場の近くに無造作に積んである本を触ろうとすると「そ
れは今読んでる本」と困つたように言う。店には電話がな
く、携帯も持っていないし、メールもできないと言う。通
信手段は手紙か直接行くしかない。帰り際に必ず「かたり
あふ通信」というA3の紙を何枚か渡される。読んだ本の
ことが手描きでびっしり書かれている。ドイツやイギリ

スの文豪や長田弘など詩人の言葉が引用されていることが多かったように思う。たまに新聞の切り抜きのコピーが貼り付けられていることもあった。大きなファイルから何号か抜き出して何も言わずに渡される。

僕が本屋で働き始め、古本市を企画したときも参加してほしいとわざわざ店まで行った。本に値段をつけるのが難しい、と少し困った顔をしながら「僕が本を送るき、そつちで値段つけて売ってくれんろうか」と言った。しばらくして送られてきた段ボールを開けるときちんと値付けされた古本がどっさり入っていた。出版社で働き始め、原稿を依頼したときは依頼書を郵送した。すぐに速達で送り返されてきた封筒をみたとき、返信用封筒も入れずに送った自分が恥ずかしかつた。今でも恥ずかしい。

あるとき訪れると店の床に積んであった本が全部片付きスツキリしていたことがあった。びっくりしていると「ここらは津波が来るっていうきね、本は山の上の倉庫に入るようにしたか」と少し寂しそうに笑った。「倉庫に行つてみる？」と誘われ、そのまま店のカギをかけて車を出した。高知市を北にぬけ、高速道路をくぐり、ついたのは想像よりもずっと大きく本格的な倉庫だった。本は全てスチール製の棚に並んでいた。蜘蛛の巣をくぐり棚の隙間を何周もした。両手いっぱい本を抱えて外に出ると「それ全部

あげるき」と店主は無造作に空の段ボールを差し出した。子どもを連れて行くようになると「ここには楽しい本はないねえ」と申し訳なきそうに息子に話しかけ「京都はえいねえ」と言いタバコを吸った。本屋を始めることは手紙に書いて送った。返ってきた封筒には「かたりあふ通信」が入っていて、そのうちの一枚には僕が送った手紙がそのままコピーされて掲載されていた。開店日にはパチンコ屋の前にあるような大きすぎる花が届いた。最後に訪れたのは去年だったと思う。「最近はいあんまり安くせられんで」と言いながら電卓をたたき、いつものように「かたりあふ通信」を何枚か受け取り、また、と手を振って帰った。

高知に行けば、次もその次もお店に行くのだろうなと思う。「本は売れんで」と森岡さんはいつもの笑顔で迎えてくれるような気もするし、もとから何もなかったかのようにお店はなくなっているような気もしている。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

汽水のほとりから (24)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

かつて山尾三省という詩人がいた。東京神田の生まれ。大学時代は60年安保の全共闘運動に加わるも、67年からは対抗文化コミュニケーション運動「部族」の中心メンバーとして独自に活動を展開。その後、家族とともに屋久島へ移住し、そこで一生を終えた人である。御存命であれば84歳だが、22前に亡くなられている。ただ彼を慕う人たちは健在で、著作は今も刊行されている。最近も、最晩年の琉球大での講義録『アニメイズムという希望』(野草社)が新装復刊し、新たに付された解説を執筆した霊長類学者の山際寿一は、「今やっと、三省さんの時代が来た」と賛辞を贈っている。

ところで、最近まで私は、その経歴から山尾三省という人は鳥取に縁遠い人であるように思っていた。ところが、或ることをきっかけにそれが間違いであると知れた。そのきっかけとは、私の手元にある一冊の古本である。42年前に出された山尾三省の『聖老人』(プリサード書店)と

いう函入りの本で、私は数年前これを近所の汽水空港で手に入れていた。当時は特に気にとめなかったが、表紙をめくると謹呈の宛名書きと著者直筆の署名があり、そこに古い地方新聞の切り抜き数葉と、どういうわけだか著者のセピア色の大きなポートレート写真が一枚挟まっていた。

最近この本をひっぱり出して謹呈の宛名に目をやると、どこかで覚えのある名である。どうやらかつて新日本海新聞社に勤務され、著作も多数あるK氏に違いない。が、なぜ山尾三省はK氏に自著を献呈したのか。思うに二人の仲を取り持った人物がいるはずである。その人物はすぐに判明した。新聞の切り抜きの中にその人が書いたと思しき記事があったからだ。書いたのは丸山勝三。記事の最後に(米子市博労町在住・画家)とある。なぜそう断言できるかと言うと、丸山氏には『で・こらそん』(富士書店)という随筆集があり、その巻末にK氏が文を寄せていたからである。拙宅の本棚には亡父が好んで集めた鳥取県関係の書籍が並んでおり、幸いなことに、そこにその本もあった。

ついでに言えば、新聞の切り抜きには「著者に聞く」という記事もあったが、それを書いたのがK氏だろう。新刊『聖老人』を紹介するインタビュー記事で、著者の写真も掲載されているが、それは本に挟まっていたポートレートと同じものだ。新聞に使われた後、K氏に返却され、彼

が記念に残しておいたのだろう。記事には本書を出すまでの著者の半生がまとめられ、その見出しには大きく「理想の共同体夢見て」、また小さく「自然と詩と信仰の道歩んで」とある。既に東京を離れた後で、著者は「多分、屋久島に骨を埋めることになると思います」と決意を語っている。

ともあれ、注目すべきは丸山勝三の記事の方であった。その文面には、「私と三省との出会いはすでに十数年前にさかのぼる。国分寺の小屋のようなどころに私達は住みついていた。三省は詩を書き、私は絵を書き、作家の宮内勝典は本を読んでいた。未来があるわけではなく、皆一様に国外脱出を考えていた。真つ先に私が脱出し、ついで宮内が脱出してきた」とあった。ちなみに、文中の「国分寺の小屋のようなどころ」とあるのは、当時「部族」の拠点の一つだったコミュニティ「エメラルド色のそよ風族」のことだろう。丸山氏は上京し、「部族」に参加していたのだ。

丸山勝三は、安来市生まれ。武蔵野美術大を首席で卒業後、メキシコ・アメリカ・スペインなどで洋画家としての腕を磨いた。文中に「真つ先に私が脱出し」とあったのが、それである。帰国後、鳥取市船岡町にいたが、後に故郷に近い米子市へ移った。その米子の自宅を山尾三省が訪れた思い出も『で・こらそん』には写真付きで掲載されている。

ただ残念ながら、丸山氏は三年前に亡くなられたようだ。御存命であれば、興味深い話がいろいろと聴けただろう。

「部族」を起ち上げたのは、当時ヒッピー族と呼ばれた若者たちであった。これについては、『Spectator』45号の特集「日本のヒッピー・ムーヴメント」に詳しい。それによれば、70年代当時、全国各地の十数か所に似たようなコミュニティが生まれていたという。74年の秋、そのうち八つの代表者が一堂に会して合宿を行なったが、そこには鳥取の私都(きさいち)村というコミュニティも名を連ねている。定有堂の奈良さんによれば、野の花診療所の徳永進先生の初期の著作『形のない家族』(思想の科学社)に、この私都村に関する詳しい記述があるとのことだ。かつて私も探して読んだことがある。が、機会があれば、いつか御本人の口から当時のことを伺ってみたいと思っている。

思うに、コミュニティの運動は、当時の左翼運動と同様に、既存社会の変革を目指すものであった。だが、左翼運動がそうであったように、80年代以降下火になる。とはいえずコミュニティの理想は、21世紀の今こそ必要ではないか。失敗からも学びつつ、それを未来へ引き継ぐべきだろう。

「従順な同盟国」にはなるな

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

2000年代はじめ、大阪で経営者が突然買った夕刊紙を朝刊紙にするのに四苦八苦していた頃、一通の招待状をもらった。招待の主は「アメリカ国務省」。

会場は淡路島。ベツカムが日韓ワールドカップで泊まっていた有名になった外資系の高級ホテルをまるまる一棟借り切り、一泊二日で会合を開くから来い、とある。

「さすが超大国、やるのが派手だな」。ちようど仕事でくさくさしていた頃だった。「いい気晴らしになるかも。それにしても、彼らの狙いは何なんだろう」

◇

◇

◇

会場に着くと、呼ばれていたのは近畿・中四国の地方新聞の編集幹部や論説担当者だった。鳥取の論説委員長の先輩の顔も見える。「ミナサント意見交換や交流ヲ深メタイデス」と挨拶があり、夜の豪華なパーティーが明けて翌朝、

同時通訳のイヤホンを付けて意見交換会が始まった。

「中国の軍備増強が著しい。皆さんは中国を怖くないのか」「なのに皆さんの新聞は、記事や社説で米軍基地の問題や沖縄の米兵の事件ばかり大きく書き立てている」。

ははーん、これが彼らの狙いか。居並ぶ各紙の編集幹部や論説委員たちは、おぎなりの感想や意見のほかは、じつと下を向いていた。

そこで意を決して手を挙げ、「おっしやる通り、中国の軍備増強は私も脅威に感じている。アメリカとの同盟関係ももちろん必要だと思う」と話を切り出した。

「だが、日本にはただ一つ、戦争できない相手がある。それはあなたたちアメリカだ。中国には対峙できても、あなたたちに向けた背中丸腰も同然だから」。そして、いまだに首都圏周辺の広大な空域(横田エリア)が米軍の管理下に置かれ、日本の民間機は米軍に許可をもらうか回避しなければいけないこと、地位協定で夜間や市街地上空の飛行訓練はやりたい放題、米兵の犯罪に国内法が適用できない国は世界でも日本だけであることなどを話し、「これじゃまるで進駐軍の時代と同じ。はたして独立国と言えるのか。まずそこから話を始めましょう」

もろに嫌な顔をされた。「大阪のよく分からん新聞らしいが、こいつ、国粹主義者か」とでも思われたのだろうか、

後日、梅田にある米総領事館から呼び出しがあった。

◇ ◇ ◇

六本木ヒルズのすぐ横に米軍のヘリポート基地があるのをご存知だろうか。都心と厚木基地を結び、いざという時大使館から要人と家族が脱出できるように確保しているらしい。ここはサイゴン、テヘランか(笑)

ウクライナを侵攻したプーチンが西側報道陣に、「あなた方はわれわれを合法でないと非難するが、あなた方だって、合法でないことをいっばいやってきたではないか」と聞き直ったことがある。だからと言ってロシアが許されるものではないが、盗人にも三分の理、だろう。

古くは、ベトナム戦争に介入するためにでっち上げたトンキン湾事件。チリでのクーデター支援やパナマ侵攻。記憶に残るのは「大量破壊兵器」を口実にしたイラク戦争だ。「初の黒人大統領か」と期待された元軍参謀総長のパウエル國務長官は、回顧録でCIAの大量破壊兵器の情報を信じたのが「人生最大の汚点」と悔いている。

◇ ◇ ◇

アメリカとはそういう国である。そう考えて用心深く、是々非々で付き合うのが本当の先進国というものだろう。国会より先にバイデンに防衛費倍増をうれしそうに報告した岸田首相は、さしづめ「愛犬ぼち」か。

作家の司馬遼太郎は日本のあるべき「国のかたち」をこう語っていた。「サーベルをがちやがちや言わせてふんぞり返る国ではなく、着流し姿で、少し廁のにおいはするが、縁側に座って近所(アジア)の相談に乗るような国」。G7開催でさも先進国のような気分だが、私たちが暮らしているのは欧米ではなく、多くがまだ貧困や政治の不正にあえぐアジアの辺(ほとり)であること、日本もその一員であることを忘れてはならない。

淡路島の会合からしばらくして米総領事館に呼ばれた。日本人の事務長は「われわれから見たら、朝日よりも共同通信の方がよほど左翼的ですよ」と笑う。そうか、それで(共同の記事配信を受ける)地方新聞を集めたのか。戦略的なのだ。「来月からおたくの新聞、取らせてもらいます。あ、これ、お土産と言ったらなんですが…」と手渡されたのは分厚いウェブスター辞典。「プロパティ・オブ・USガバメント」米政府所有」の刻印がある。

これでも読んで妙な反米主義などに染まるな…:というところか。あの国はどこまでも「上から目線」なのだ、と本棚にある真っ赤な表紙の辞典を見るたびに思い出す。

深い学びをめぐる XI

松田 裕史

(高校教員)

「小学校からの英語教育の是非について」「外国語を学ぶ意義について」「英語以外の外国語を学ぶ意義について」

など、外国語にまつわるテーマは大学入試の自由英作文でもよく出題される。検定教科書でも頻繁に扱われるテーマでもある。現在使用している教科書でもバイリンガリズムをテーマとしたレッスンがあったので、これを大学入試の問題と重ね合わせながら単元を拡充してみることにした。特に、最近では「機械翻訳」の話題も入試で登場回数が増えつつあることもあり、それを中核となるテーマとした。

より具体的には「Suppose that, in the future, machine translation overcomes all the weaknesses mentioned above. In this case, will humans continue to study foreign languages (機械翻訳が現在の欠点を克服した場合でも人は外国語を学び続けるだろうか?)」という、北海道大学の入試問題で扱われた問が主発問となる。生徒たちは2年次にマイナー言語であるチェロキー語 (Cherokee) を扱った単元、3年次の7月にⅡを扱った単元を学習し

ており Machine Translation (機械翻訳) というトピックはそれら複数の単元を貫くものとなる。学年を超えた単元横断型のトピックとも言える。関連した言語材料のインプット、アウトプットも経験していることが大きな強みとなる。また、大学入試の題材でも頻出題材であるので目の前に入試を控えた生徒のニーズにも合う。

さらに、3年次の「現代文B」で学習した内容も言語活動に大きく資することも期待される。具体的には、詩人・長田弘のエッセイ「アイオワの玉葱」と倫理学者／哲学史家・熊野純彦の「ことはへの問い」を生徒が学習済みであり、それらは本課のトピックを考える上で有用なディスコースとなりうる。人文科学の領域内での教科横断型とも言える。ただし、教科横断はあくまで手段であって目的ではない。単元や授業のゴールに迫るには教科横断が必然だったという方が理に適っている。他に、ロシアの言語学者、ヤコブソンによる言語の6つの機能、Lesson 7 の冒頭に置かれているオーストリアの言語学者、ウィトゲンシュタインによる箴言も思考を活性化する材料として援用する。教科書本文以外に多様な素材をインプット材料として使用するが、これらは生徒の価値観や世界観を広げる契機となりうるもので、本題材を単に情報のやり取りに終わらせない鍵を握る。また、生徒への発問を工夫することで、生徒

がこれまで思い至らなかった言語の価値や意義に気づかせ、生徒の価値観や世界観に揺さぶりをかけることも可能な教材である。

過去数年分の大学入試の中から同じテーマの問題がどれくらい出されているか調べてみた。枚挙にいとまがないことは予想できたが、東大、大阪大、早稲田大、慶応大など名だたる大学もござって出題していることが分かった。問題を解くためというより、テキストとして読んでみても新たな視点が得られる英文も多く存在し、それらも時間の許す限り授業で扱った。

外国語を学ぶ意義についてわざわざ考えることもないかもしれないが、頭から離れないテーマの一つである。学習指導要領に書いてある意義が薄っぺらい(と感じてしまう)のも理由の一つだ。また、チャットGPTが登場して、学校で外国語を学ぶことの意義がますます問われるようになる。一〇年以上前に、『ヒューマニティーズ 外国語学』という本が岩波書店から出版された時、大いに期待して読み始めたが、内容が抽象的過ぎて具体的にどう落とし込むか分からなかった。理念、哲学は大切だが、具体につながる道が見えないと辛い。

実際に授業が始まっていく前に、集英社のクオーターリー雑誌『kotoba』が外国語を特集しているのにたまたま出会っ

たのは幸運だった。特集名は「やがて愉しき外国語」(愉しきを「悲しき」に変えると村上春樹の書名になる)。

なにしろ寄稿者は指折りの顔ぶれ。長年、ラジオの英語講座を講師として牽引されてきた杉田敏、大杉正明、遠山顕。そして、酒井邦嘉(言語脳科学者)、中条省平(フランス文学者)、高野秀行(『語学の天才まで一億光年』の著者)、鳥飼玖美子(異文化コミュニケーション学の重鎮で通訳/翻訳者の視点からも英語教育に提言)、伊藤雄馬(マイナー言語であるムラブリ語を研究する言語学者)、野谷文昭(ラテンアメリカ文学研究者)、キリーロバ・ナージャ(『6カ国転校生 ナージャの発見』の著者)、吉岡乾(『現地嫌いなフィールド言語学者、かく語りき』の著者)、亀山郁夫(ロシア文学者)など。

大杉さんの言葉で気になったのは次の3点。

「スピーチはパーソナリティーである」「言葉は人間が紡ぎ出してこそ、初めて人の心に届く」「GPTが発達して機械翻訳が普及しても、自らの言葉を持たない人間は実に無力で惨めです」

これらの言葉はチャットGPTが登場前のものだが、今なら大杉さんは何というだろうか。将棋や囲碁のプロ棋士が体感している世界が我々の日常にも押し寄せている。(続く)

家族教師と家族葬

～人を看るとは？～

芝野 浩貴 (地球探家)

3月6日は母親の命日である。武道家として話を伺った時、

「死ぬ直前まで稽古をして、蹲踞の状態で亡くなった人がいる」というエピソードを聞いたことがあるが、心の中では「それは誇張しすぎだろう」と思っていた。母の病名は〇〇癌という特定の部位の病いでなく、腫瘍が各臓器に根を生やしていたので手術も出来ず、父と妹と私だけがその事実を囲み、インフォームド・コンセントも断り、自宅介護した。父と妹に介護士・看護師の代わりとして動いてもらい、私が主治医・栄養士・カウンセラーの役を担った。私が母と共有したのは、

〇歩けるうちは歩くこと(私も一緒に散歩した)

〇繊維を含むものを食べ便通をよくすること

〇糖分は控えること

〇水を飲むこと

〇笑うこと(とにかくストレスを溜めない)

〇脳の奥と腸の奥まで酸素が届くように意識して、深呼吸

を欠かさないこと

〇旅行は続けること

などである。温泉も好きで入浴させていたが、腫瘍が大きくなり、妊婦さんのようにお腹がかなり出てからは、一人で歩きにくくなることや周りの目を気にして外湯は行かなくなつた。死ぬ前日まで自宅の風呂に入り、湯船から出る時に水道の蛇口に捕まって外に出ようとしたため、蛇口は壊れた。亡くなる日の朝、母の「喉が渴いたので飴をくれ」という声に反応してから、当時勤務していた県立図書館に通うための汽車の中にいる時間帯に母の息が途絶えたので、冒頭の「人間は死ぬまで生きるのだ」ということを実感した。余命半年のところを3年間生き延びた。自宅葬で、小さな町の「しがなない散髪屋さん」のために弔問客が〇〇件を越えたことが母の人徳だったのだろう。自宅死を望み、死ぬ3ヶ月前まで好きな散髪をしていた。

それから、21年経ち……ことも家庭庁が4月から設置されることのナンセンスは以前述べた。いじめ・不登校・自死(文科省)、ヤングケアラー・障害児・ネグレクト・児童虐待(厚労省)、少子化・子供食堂・児童手当(内閣府)、少年・少女犯罪(警察庁)などの問題はそれぞれ悪化しているのに一本化して解決などできない。マンツーマンでの個

室の面談がよいくないことも以前述べた。必要なことは一人の子供に対して、どれくらい多くの人間が関わることでできるかのサポートをケアすることである。そこで私は個室になりがちな家庭教師でなく「家族教師」言つて、家族全員の人の面談を繰り返しながら、家族全員の絆を見直すと共に、それぞれが個人として社会とのネットワークを広げる力がつくように伴走する活動をしている。家族主義の打破である。

具体的には祖父母世代の人に野菜や果物の作り方を教えてもらったり、親世代の保護者にはどんな仕事をしているのか尋ねたり、子供世代には受験勉強も含めた学問についての対話をしたりである。赤ちゃん世代とは自然に任せて戯れる。その根底には、人は何歳になっても学びが必要であり、「学ぶ人たちの集まりには分断や差別はない」という信念がある。

私が教員になってからは、狭い意味での家族や親族と一切関わらず、「学校の生徒ファースト」だったことを母は知っていたので、教員には休みがないんだと思つて死んでいった。教員引退した理由の一つに父の介護があつたが、地球探究しているので会話そのものはなかった。アナログ原理主義の私は、携帯やスマホなど持ったことはなかった

が(私に用がある人は学校に来れば必ず会えたから)、妹から父の様子を連絡してもらつたためにスマホを持った。私の予想通り私が引退した年の9月、父は脱水から寒気が止まらなくなり、風呂場に駆け込んで臓器が止まり死んだ。しかし、父の私への声かけの様子と父の足元がふらついていたことから異変を感じ、すぐに風呂場で意識不明の父を発見し救急車を呼んで酸素吸入と点滴で奇跡的に蘇つた。フェニックスの父はそれから数回、入院を繰り返したが、自宅死を望んでいたのも、妹に介護士、看護師、栄養士の役を担ってもらい、私が主治医とカウンセラーを担当して自宅にケアした。それから8年間、好きな運転(父はバスの運転手だった)と囲碁を死ぬ1ヶ月前まで満喫して、今年の共通テスト数学の時間に骨になった。

コロナ禍の家族葬なので私からは父の死は口外しなかった。(死亡届と新聞掲載は手続きしたが)それでも父が長年勤めた会社の知人や近所の子供や、血縁としては遠い親族の若者などがお通夜には足を運んで父の顔を見に来てくれた。告別式も家族葬なのに、父の知人や親族も会葬してくれて、50名は超えた。父は不遇な幼少期を過ごし、親に捨てられているので、愛に飢えていて、分け隔てなく人と接してきた。しかし、親族との交流はなかったので、亡き母が苦勞して複雑な家系をもつ家族群を繋げた。家族葬な

のに親族葬となったのは母の力であった。

私が「家族教師」をするのも、血縁や地縁や家柄など打破して、「家庭」でなく、生きている人の繋がりを作るためである。学校関係者の申問が「閉鎖」(厳密には教員を越えた関係者2名)であったことには苦笑するしかなかった。

アナログ力、デジタル力、人間力の衰退で、声を発しない子供たちの教育ができるのかと。教員はエッセンシャルワーカーでなくて、ブルシットジョブなのか？ 謝罪と管理とコロナ対策に追われる管理職。事勿れ管理職とクレイマーの保護者の間で鬱になる先生方。コロナであろうとも雪が降ろうとも休めずに、働かなければいけない人たちはたくさんいる。公務員や議員は安定職ではない。生活が保障されるからこそ、他者へのサポートに専念でき、また継続できるのではないか。

芝野家は滅びるが、家訓の「常に人のために尽くせ！」を引き継ぎ、地球探究家は活動する。人としての価値は論破することや知識をひけらかしてマウントすることにはない。父の告別式で流れた曲は母のお気に入りでもあり、県立図書館勤務時代、忘年会の幹事として歌った曲でもある美空ひばりの「川の流れるままに」であった。さよなら旧式の学校。パターナリズムの病院。

人は理由やできない言い訳のために生きてるわけではな

い。目の前の命に敏感たれ！合掌。

岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』

—生活世界における公共性と倫理—』小取舎 2023

一八〇〇円本体



橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
岩田直樹

「現象学」と「倫理」の交差点。橋田邦彦の思想を掘り下げることで、現象学・アーレントの思想の深奥を探る。本書は、橋田邦彦の思想を掘り下げることで、現象学・アーレントの思想の深奥を探る。本書は、橋田邦彦の思想を掘り下げることで、現象学・アーレントの思想の深奥を探る。



9 784961 249724
9 784961 249724

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈

—生活世界における公共性と倫理—

岩田直樹

小取舎

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
岩田直樹

小取舎

映画の中の一冊

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

本を主役にした映画は「薔薇の名前」や「ナインスゲート」「プロスペローの本」「私家版」「愛を読む人」などなど、決して少なくはないが、ここでは、作中、ポツンとさりげなく、かつ思わせ振りに出てくる一冊の本、というものについて思い出せる範囲で書いてみることにしよう。(記憶違いの段は何分にも御容赦を)

「永遠と一日」(一九九八)は、テオ・アンゲロプロスの作品。

主人公が過去と現在、夢と現実のあわいを行き来するような、一応メインのストーリーらしいものはあるのだが、取り留めのない断片の集積のような曖昧模糊とした映画である。

故に、主人公が古書店で手に取る本がエルヴェ・ド・サ

ン・ドニの『夢および夢を支配する法』(訳題『夢の操縦法』)というのには理にかなっている。

これは、十九世紀に書かれた、夢日記から発展して、人為的に、見たいと思った夢を見るために行った摩訶不思議な実験を記した本である。どこか、デゼツサント公爵の人工楽園に通ずるものを感じさせる。

映画の主人公が、色々なきっかけで、過去を思い出す辺りを象徴させたものだろう。ストーリーと無関係に、自転車が頻繁に登場するのも、車輪の回転が窮まりのない時間をほのめかしていると考えられる。

カラインドルーの切ないようなテーマ音楽が大変印象的な作品でもある。

フランク・ダラボンの「ショーシャンクの空に」(一九九四)は、もつと直截的である。

無実の罪で投獄された主人公が、知識と経験を武器に所内での地位を得、脱獄のための地歩を固めていく。

刑務所内の図書係になり、予算を取って蔵書を整備する場面では、送られてきた箱の中から取り出した本が大写しになる。

アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』。

言わんとする所は明らかだろう。

本来、後半の復讐譚部分が面白いお話なのだが、子供の頃に読んだ『嚴窟王』では、前半のシャトー・ディフからの脱獄場面の方が強く印象に刻まれている。(多分、高垣眸か野村愛正の訳だったと思うが)

原作はステイーヴン・キングの「刑務所のリタ・ヘイワース」。ただ、作者自身はデユマを意識している様子はない。辛うじて、それらしく匂うのは、結末近くに「希望」という語が一、二回出てくる所くらいだが、それとても作為が偶然かは分からない。

フランシス・フォード・コッポラの『地獄の黙示録』(一九七九)は、大金を費やしたという意味では大作と言うべきだろうが、最初から最後まで何ともクレイジーな映画である。

原作はジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』であるが、川を遡行し、目的の人物を連れ帰る、という物語の枠組みが(舞台もアフリカであった)使われているだけで、九割方は監督の創作と言ってよからう。

主人公は、密命を帯び、紆余曲折の中、ジャングルの只

中の川を遡り、国境を越えてカンボジア領内に入り、遂に標的である大佐の「王国」に達する。

彼の居室を探る際に見えるのが、テンプルの上に無造作に置かれた二冊の本。一冊はペーパーバックの『祭祀からロマンスへ』(ウェストン)、もう一冊がジエームズ・フレイザーの『金枝篇』である。

前者は聖杯伝説の起源を探る本。後者は古代社会の王権を中心に論じた、民俗学の総合データブックのような本である。

察するに、古代社会における、生命の死と復活の象徴である「王殺し」、聖杯伝説の病める王と王国の衰退、これを救う騎士のモチーフ、水の隠喩などを現代に再現させたかった、ということだろう。そのためには、ベトナム戦争という、壮大かつ狂気が日常化した舞台を選ばざるを得なかった。現代世界では、どう料理しても再現不可能な「王国」を作り上げるためには。

その目論見は成功した。王の交代は、追う者と追われる者との入れ替わりによって成就する。

鳥取あれこれ その七十九

内田 克彦（地域研究家）

東洋幼稚園（戦後は「岸辺幼稚園」という）を作った岸辺福雄は、鳥取生まれである。上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園―幼児教育の歴史』では、「児童文学と幼な子たち」の章の中の「東京・東洋幼稚園と早蕨幼稚園」の項で、岸辺を取り上げている。

岸辺は、口演童話家、即ち子供たちを集めて童話を語って聞かせることを仕事とする人たちの、「三羽がらす」と言われた巖谷小波、久留島武彦と並ぶ一人である。岸辺は、なぜ幼稚園を作ったのか、一九一〇（明治四三）年四月、神田に園舎を新築した折の『我が幼稚園の一日』から引用しており、再引用する。

元来子供好きの性分のために、つとに身を児童教育に投じ、兵庫県、東京府師範学校などで、前後十四（ママ）年間、子供の教育に従事しました。その間、もっぱら遊技法の研究にこころぎし、児童といっしょに、日々たのしく遊びたわむれましたが、長年月のあいだには自然得るところがあつて、いよいよその興味が忘れ難くなりま

したから、更に一歩を進めて、幼児教育を自分の天職と信任して、一生この道のために尽くそうと思いたち、終に、ここに、この幼稚園を創設した次第であります。

岸辺福雄は、ウイキペディアには載っておらず、集めた各種文献等から抜き出した結果は次のとおりである。

一八七三（明治六）年、岩美郡大岩村に、鳥取藩医佐藤秀林の次男として生まれる。

八三（明治一六）年、兵庫県香住町上計へあげんに移る。上計尋常小学校、同高等学校を卒業。

九一（明治二四）年、兵庫県尋常師範学校に入学。

九六（明治二九）年、兵庫県尋常師範学校を卒業し、同年六月、兵庫県豊岡尋常小学校で訓導に。

そして、訓導時代に子供の遊びに関心を示して遊戯法の研究を志し、その成果として一九九九（明治三二）年、最初の遊戯に関する著作である『実験新游戯』を刊行する（遊戯に関する著作はすべて「佐藤福雄」である）。

一九二五（大正一四）年五月一〇日発行の『週刊婦女新聞』には「私の廿五年前 諸家の回答（到着順）」として、「東洋家政校 岸辺福雄」の回答が載っている。

私の廿五年前は、東京で半学生生活をしておりました。無論ヒトリボツチでした。其冬志摩の国からはるばる講習会に頼まれたので、態々々々わざわざ出かけました。「略」元日だ、未明に伊勢大神宮に参拝して祈念した。祈念の中には、無論天下泰平国家安穩もあつたけれども、プライベートもあつた。御利益觀面「てきめん」、ありがたくも新年早々結婚問題が湧いて来た。時来ると、四月三日を卜して新家庭の第一日を祝した。「略」子供は四男四女、漸く長女を嫁がせた。

ここに書いてあるように、一九〇〇(明治三三)年、京都府久美浜町出身の岸辺かよと結婚し、岸辺姓に。この頃は、既に上京していたようである。川勝泰介「岸辺福雄」親のため子のため『解説』に書くように、「東京府師範学校遊戯専任教師」に就いていたかもしれない。

一九〇二(明治三五)年には、『遊技的教授法』及び『第二実験新遊戯』を刊行、東京府青山師範学校講師に就いている。翌年には共著で『実験日本新遊戯』を刊行。

一九〇三(明治三六)年一〇月、「東洋幼稚園」を創立する。当時住んでいた牛込納戸町の自分の家を園舎として保育を開始する。当初は、園児数も少なく、いづれつづれば

てしまふに違いないと、うわさされていたが、だんだんと繁盛するようになり、手狭になつたので、一九一〇(明治四三)年四月には、神田神保町に園舎を新築している。その理由として、岸辺が、当時次第に、口演童話家として有名になつたことがある。前年の一九〇九(明治四二)年には、『お伽噺仕方の理論と実際』を刊行している。

「保育證書」の写真が載る、園児の一人であつた藤田圭雄(たまお)は、次のように語っている。

五十年の年月がたつたいまでも「それでナ、羊がナ、おじぎをしましてナ」とか、「そうでありましたヨ」とかいった福雄のお伽噺の話しぐせが、耳の底に残っている。なお、園舎新築と同時に「東洋家政女学校」を開設している。『大因伯』一九三二年四月号の「学校めぐり」の中で、「異色ある女子教育 岸邊福雄の東洋家政女学校」の見出しで、次の記述がある。

小學校卒業後後二年、高等小學の年月で女子に必要な學力を十分得させ、裁縫、洗濯、料理、その他家事切を教へ、更に一年高等科に入ればその補修なさしめると云ふのが校主岸邊氏の意向である。

(以下、続く)

八代日記

(三六)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

二月某日

名古屋へ。お呼ばれして、K・Dハポンにてケバブジョンソンのライブ。過去のライブ記録を調べたら、ハポンに来るのは六年ぶりだった。久しぶりのハポンは何だか風格が増していたというか、場所の空気がすごく良かった。内装の木材が年季を纏い、場への馴染みを増している。キッチングラスやお皿が丁寧に磨いてあり、清々しい。いいイベントが続いているのと、スタッフの方の日々の手入れが行き届いているのがよくわかる。久しぶりに会う店の方々も相変わらずとても安心。しかし六年か。六年前は書店員だったし、結婚もしてなかったし、子どももいなかったな。また来れてうれしいです。

六年前に空港からハポンに向かう前に、名古屋の名書店ちくさ正文館に寄ったことを思い出した。音楽・芸術・歴史の棚が特にイカれていてこんな勝手なこと自分もしたい!と思ったものだ。店長の古田氏にご挨拶させていただいたが、たいへん親身に書店にまつわる話をしていただき

勉強させていただいた。勉強させていただいたと言えは、長崎書店時代はそれこそ本の学校にも行かせてもらったし、定有堂にも連れて行ってもらった。なんとニューヨークのインディペンデントな書店の見学ツアーにも連れて行っていただいた。その他色々な書店や出版社にも繋いでくれた。俺は不義理な男だ…。社長、お元気にしていらいっしやいますか…。こんだけ書店のこと教わっというて今なにやってんだよ。本屋に勤めたい思い、つのる。

ケバブの前に出た佐藤守晃氏のライブが群を抜いて良かった。ロックンロール。前回書いたシムムラさんと合いそうだなと思っただけに何度か共演しているとのことだった。トリのケバブもがんばって、ダブルアンコールまでいたただく。終演後も出演者、お客さん混ざって食事と乾杯。ハポンの売り上げも上がったらしく何より。

二月某日

神戸へ。お呼ばれして、ヘラバラウンジにてケバブジョンソンのライブ。共演はヘラバ店长キムラさんと、ヘラバのドリンク担当・北島くんのレスポンスマン。そして女装の無国籍(?)ギタリスト・シンガーのジョンソンとsu擁するジョンソンとsuバンド。イベントタイトルが「ジョンソン&ジョンソン(プラスチック)」。

本番、またケバブはトリだったけど、前の2組が素晴らしかった。レスポンスマンはドラムに加えパーカッションストがいるのだが、彼が床に何枚かシンバルを逆さに置いてものを鳴らして、その音がたいへんに良かった。

ジョンソン t s u さんはおそらく謎の外国から来た人物という設定で、外国語風のまったくの造語で歌ったり喋ったりする。曲は複雑でギターもドラムもテクニカルで、その2名に加えバイオリンとアコーディオンという編成。この編成のアンサンブルがとてもカッコいい。

ケバブもがんばって、アンコールまでいただく。神戸は男性客の野次・怒号が素晴らしく、身が引き締まる。「もっとやらんかい！」など。

数年ぶりにケバブを観に来てくれたというお客さんに、梅ざらめ味の柿の種をいただいたのだが、これすごくうまいですね。

翌日、なんの因果か副知事の前でプレゼンテーションをせねばならない仕事が入っていたため、ライブが終わったらずぐにメンバーを置いて帰ろうと思っていたのだが、DJの真野さんの選曲が素晴らしすぎて結局閉店まで踊ってしまった。真野さんには毎回DJをしてもらっていていつもカッコいいのだけれど今晚は特に良かった気がする。閉店後打ち上げだということでこれまたすぐにおいとましよう

と思っていたのにキムラさんの話が素晴らしすぎて、深夜2時まで飲んでしまった。宿に帰ってシャワーを浴びて4時…。明日大丈夫なのか。

二月某日

無事にプレゼンをこなす。

二月某日

次の土日は東京へ向かう予定。お呼ばれして、下北沢ベースメントバーにてケバブジョンソンのライブ。ろくようび、と言うすぐく若いユニットに声を掛けていただいた。二回りくらい年下。若い方が聴いて楽しんでくれているのはありがたい。彼らは楽器がめちやくちやに上手いのだが、彼らのいるであろうシーンの音楽もチェックしてみたら、みな上手い！何だか力みがなくてリラックスして演奏している姿がうらやましい。自分は必死こいて体もガチガチで演奏しているので見習いたい。

今月は3度も遠出してしまったので、出費がやばい。真っ赤っか。近所のツタヤ跡地にできそうなハードオフ・オフハウスにいろいろ売りに行かねば…。親父が飛行機ばかり乗るもんで子どもの服がない。下の子は上の子のお下がりしかない。

四姉弟 続

秦阜 梅林

(楽人)

芝居を創る現場でこそ見へて来る事があり、見方、感じ方が稽古・本番を重ねる内変化して来る事もある。役者の力量によって演じてゐる人物像が鮮明になったりぼやけて了つたりも。

概して、仇役には難しひ要素が沢山詰まつていて、其れによつて更に憎たらしく見へて来たり、逆に同情されるべき哀れきが一層際立つて来たり。クルイギンやソリヨーンイ、老医師チエブトイキンといった曲者達。亦姉妹中の或る女優が役の人物の教養を装つてい乍らも一寸した台詞の言ひ廻しに「はて？此の人はいったひ「アンナ・カレーニナ」を読んで居ないのだなあ」……と残念に思へて了つたりもする、何故か？其れは「アンナ……」を読んで居る人が「其処で此の台詞を他人事みたいなそんな調子で」投げやり云ふ筈は無ひから……。容姿ならばヴェール一枚で覆へるが品や徳性は難しひ。そんな些細な事が周りで観る

極めて客観的な目には日々新鮮に映る。演技の巧拙、解釈以前に、役を演じる事は単に台詞や姿を代弁する許りでなく、作家の描ひた「人物」を、どう立体化し、生きた言葉や身体で表現するか？つまりどんな「人間」を見せるか？(彼(女)だつたら此処でどんな声、口調で此の台詞を聞かせるか？演者のクリエイトは観る人にガイダンスにもなれば妨げにもなる……)

黙読をして居る時、人が全ての登場人物を「自分なりに想像し、自分の演出で」読み進めている事を我々は日常余り意識して居なひ。

なのでいざ、芝居や映画で具体的に観せられると新鮮な驚きの興る訳だ。

筆者の母が先日、あるシチュエーションで、まるで芝居のやうな台詞を毅然として吐いたので「何」……と訊ねると「以前(随分昔……) 観た或る芝居で「杉村春子と有馬稲子2人のシーンで後者の言つた台詞」だと云ふ。名優一世一代の演技は観客の生涯に直接影響を及ぼす事さへあるだらう……」



最近此の芝居の案内で出演した○○演者紹介で元農奴や下僕等所謂「下々」も人物模様を彩る一旦として生き生

き描かれてゐるのは「作者の強いメッセージだ」と申し上げた。19世紀末〜20世紀初頭未だ身分制度の根強く残る時代、現在だったら直ぐに「人権問題だ！」と問題の真相の明らかになる前に騒ぎ立て、事前に地雷撤去され、寧ろ其処には「触れられなひ」やう直ぐ表層的に処理されて了ふだらう類のジャンルだが…敢へて。

群像劇で「様々な人間を描く」ことは、かういふ問題への提起も当然絡んで来る…敢へて様々な形を借りて訴へるのは芸術の重要な仕事であり役割であらう。

20230210

今回の一冊L・トルストイ「アンナ・カレーニナ」〜4
光文社古典新訳文庫版

今回の一枚R・シューマン「謝肉祭」作品9

- ①A.コルトーpf②A.ルービンシュタインpf
- ③C.アラウpf (rec.1966 アムステルダム) ④W.ケムプ
フpf (rec.1972 ハノーファー) ⑤G.アンダーpf



(イラスト・秦阜梅林)

横たわりながら活字を考える

『校正の二ころ』に寄せて

三浦 永理

(二十八歳・女性・教員)

病気になってしまい、その上症状も悪化したせいか、この一ヶ月、頭の中から言葉が消えてしまった。基本的に「お腹がおかしい」「痛い」「とても痛い」などと考えているうちに一日が終わる。本を読む余裕がある日は調子が良い方で、寝るしかできない日も多い。世の中が目まぐるしく変わる中、私の体の中でも目まぐるしく世界が変わっている。

おかげさまで、私は「病床でも」なにかをやり遂げた人の精神力にひれ伏したい気持ちになっている。身体の方に精神がとらわれてしまうような状況でも、精神をもって何かをやり遂げようとするその強さ。今までもその人たちの努力や作品は素晴らしいと思っていたが、身をもって彼らは並大抵の意志の強さで成し遂げたのではないと感じるに至った。

一方で、「病床でも」最後にペンを持つ力さえ残ってい

れば、なにか残せるものはあるとも言える。ひとたび病気になってしまえば、普通に仕事をしたり、普通に家事をしたり、という健康な人の生活のリズムには入りづらい。それでもできることを探したときに、時間や場所に関わらずにできること、つまりは言葉を編み出すことになるのかもしれない。

本当に何もできなくなった時、私の手元に残るのは、言葉と向き合う力だろう。そうやって、言葉にする時間を持ちたいと思って、私が使うものは、枕元に置いたペンと手帳ではなく、パソコンである。

「ワープロ、パソコン、携帯電話の普及は、(略)大きな影響を日本語表現に与えました。それは、だれでも自分の言葉を、最初から活字の形で見るようになったことです。(略)つまり、現代の書き手は、原稿執筆の最初から、客観的かつ冷静に言葉と対面することになります。」(『校正の二ころ』・大西寿男)

横たわりながら読んでいた一冊を通して、パソコンで書くこととペンを使って書くことは、私にとってどう違うか考えた。

私は手書きの文字がきれいではない。子どもの頃から

苦手意識があつて、とうとう大人らしいきれいな字体や、女の子らしい丸っこい字体になることもないまま、この歳になつてしまった。中学の頃には、そこまで字がきれいではなかつた教員に、「字をきれいに書きなさい」と美文字練習のようなものを渡されたこともあつたが、なぜこの人に言われなくてはいけないのだと中学生らしく思つてしまつたせい、真剣に取り組むことはなかつた。

と、今になつて思うが、なぜあの時、あの教員がそんな本を私に渡してきたのか。それなりに勉強もして、素行良好、なのに手書きの文字が汚い、名門女子校の一生徒。「書いていることは真つ当なのに、もつたいない」と思われていたのかも知れない。

パソコンで書いているときに、私はそんな人格分裂に遭遇せずに済む。きちんと人に伝わるような文字になつているし、自分の考えていることが冷静な活字体となつて目の前に現れる。あたかも自分が読んできた小説に載つているように。そこでは、手書きの時とは違つて背伸びがでてる。私は、偉大な作家ではないのだけれども。

確かに、これだけ活字が身近にならなければ、私の手書きで書いた文字達は、「字は人を表す」の論の人からすると「大したことを書いていない」「読むに値しない」と思

われてしまふ代物だつただらう。

一方で、校正者である筆者・大西氏は、デジタル・フォントが言葉の客観化という錯覚を与え、「おなかの底から押し込まれる」肉体性を失わせており、ssssなどでは裸のまま言葉がさらされていることを懸念する。誤字脱字、誹謗中傷、フェイクニュース、練られずに世界に流れ出る言葉であふれる時代になつた。

そのような危険性の一方で、あらゆる人に言葉と向き合うことが求められる時代になつているとも言い換えられる。そして、活字を手にしたことで、私のように伸び伸びと言葉を書き、他の人に見せられるようになった人間も多いはずだ。

大西氏は、活字の歴史をこう語っている。

「五〇〇〇年を超える文字と本の歴史の中で、一五世紀のグーテンベルグ以来、活字はずつと特権的な一部の者の手にありました。私たちはいまようやく、自分たち自身の言葉を伝え表す活字を手に入れはじめたところです。」

活字は、私を自由にする。書くことを通して。だが、何にもまして、読むことを通して。

野苺事件 ミス・マープルからの贈り物 (二)



ドラメリア (座敷わらし)



突然の贈り物。つながらない電話。不安に駆られながら数日が過ぎた。実家の近くであればちよつと覗いてきてもらうよう頼めるし、せまい田舎のこと、なんとなく様子も伝わるものだ。しかし、ミス・マープルの住まいは隣町で、しかもかなりの山奥だった。

これはもう、自分で様子を見に行くしかないのでは。そんな覚悟を固めたある日の昼休み。むなしく鳴り続けていた呼び出し音が、不意に途切れた。向こう側の気配。

「はいはい、もしもし。……あらあらまあ、ドラメリアさん？」

耳に飛び込んできた明るい声。間違えようもない、ミス・マープルだ。……なんだ、お元氣じゃないか。ああよかった。渦巻いていた不安が、しゆるしゆるとしぼんでいく音がしたような気がした。一方、教え子の不吉な想像とは反対に、ミス・マープルのお喋りは止まらない。

コロナでしばらく旅行もせずに家でじっと我慢していたんだけど、ついに京都に出かけたの。そうしたら、百貨店

に行つたときにこれだ！と突然閃いちやつて。いつもおたよりをくれる皆に贈り物をしようと思つたの。百貨店の喫茶で、鞆に入れていた年賀状から宛名を書いてね。あなたには素敵なカップ、他の人にはちよつといいタオル。送り先が住所しかわからなかつたけど、大丈夫、田舎ですから電話番号がなくても届きます！と無理を言つちやつたわ。よく聞くとあちらこちらに突つ込みどころのある話は、なおも続く。

でもね、電話番号がわからないものだから、こちらに戻つてきちゃつたものも沢山あつて。

「それでね……」

かつて、その日の授業でとつておきの蘊蓄を語るときのように、ミス・マープルは一拍置いた。

「うちのタオルは毎回おろしたて。いつだって、手触りふわふわなのよ」

・編集後記……「猫の日」(二月三日)に合わせて展示をしていたら、生徒から「私も愛猫家なんです」と告白が。アイビヨウカつていい響きですね。ドラメリア(編集長)

定有堂教室「読む会」講師の新刊です。岩田直樹「橋田邦彦・

現象学・アーレントの再解釈」生活世界における公共性と倫理」

小取舎 2023 一八〇〇円本体

奈良敏行(発行人)